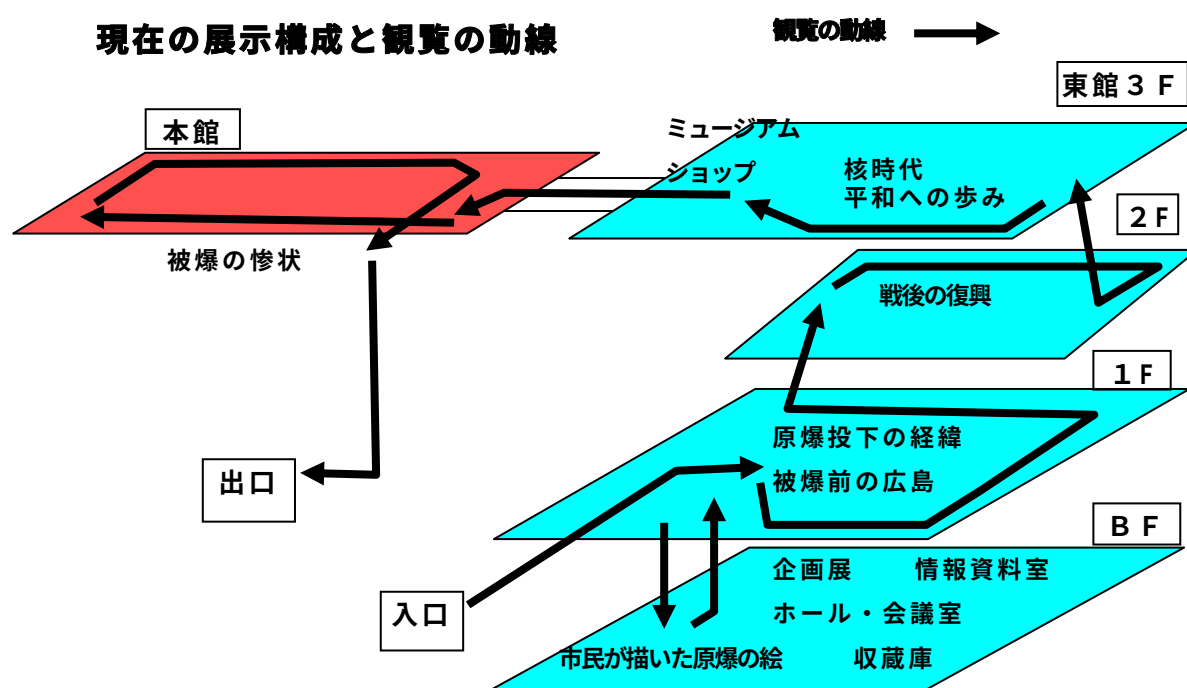


3 展示の更新等

(1) 常設展示などの現状

常設展示は東館と本館の2つの建物で行っている。東館は、1階で被爆前の広島への歴史の歩み、原爆が広島に投下されるまでの経緯、2階で広島復興の歩み、3階で世界を取り巻く核の情勢や広島への平和への取り組みなどについて展示している。また、本館は、1945年（昭和20年）8月6日の被爆の惨状などを展示している。来館者は、東館から入場し、東館から渡り廊下を渡って本館へ向かい、本館から出るというひと筆書きの動線に従って観覧している。



来館者は東館から入館し、被爆前の広島などの展示を観覧する。その後、本館に移動して被爆の惨状の展示を観覧し、本館から退館する。



写真5 本館展示の観覧風景



写真6 東館展示の観覧風景

展示パネルの解説をすべて読みながら観覧する場合の平均所要時間は、約3時間であるが、これに対し、来館者の実際の平均観覧時間は約45分である。そのうち、本館の被爆の惨状に関する展示の観覧時間は約19分となっており、平均観覧時間の4割しか充てられていない。来館者には、より長い時間をかけて観覧してもらえよう、展示内容を充実するとともに、時間がかけられない場合であっても本館の被爆の惨状に関する展示を優先して見てもらえよう動線の見直しなどが必要である。

本館の展示は被爆者の遺品などの実物が半数を占め、見て理解することが中心となっている。一方、東館の展示は文章による解説パネルや図表が全体の約4割を占め、読んで理解することが中心となっている。それぞれの展示内容に対応した展示手法について検討する必要がある。

企画展示室、情報資料室など常設展示に関連する諸室は、場所が分かりにくく、また、常設展示の観覧の動線から離れているため、来館者の利用に不便であり、配置の見直しが必要である。

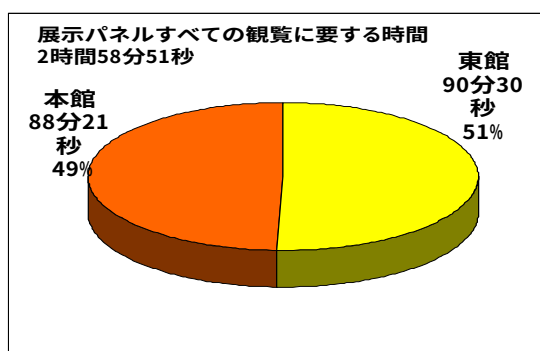


図5 展示パネルすべての観覧に要する時間
(常設展示の観覧に要する平均所要時間)

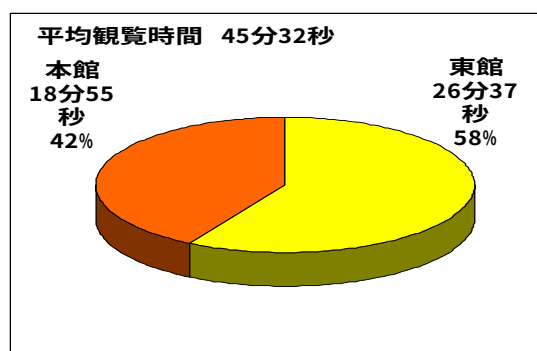


図6 平均観覧時間
(任意の調査対象者の実際の平均観覧時間)

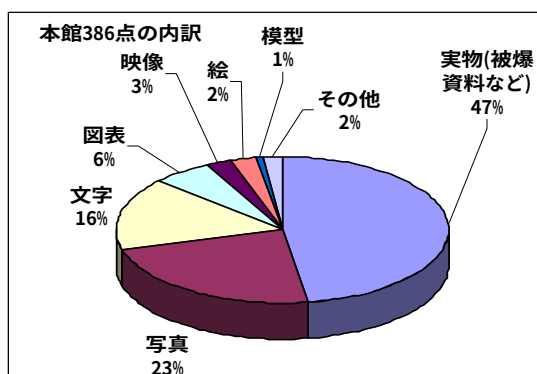


図7 本館展示点数の内訳

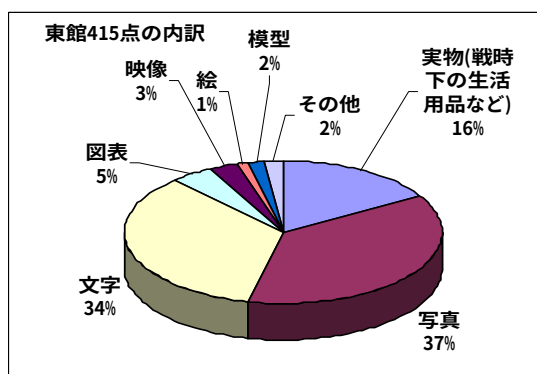


図8 東館展示点数の内訳

(注) 実物：犠牲者の遺品、被爆に関係する戦時下の資料、文書資料など

(2) 課題

① 観覧動線及び諸室配置

来館者が本館の観覧に十分時間がかけられるようにするとともに、展示を選択して観覧することができるように、観覧の動線を見直す必要がある。

また、企画展示室、情報資料室など常設展示に関連する諸室や、ミュージアムショップは、利用に不便な配置になっている。地下と3階に分かれた事務室などの配置についても、効率的とは言えない状況にある。観覧の動線の見直しと併せてこうした諸室の配置も一体的に見直す必要がある。

② 展示構成

常設展示はこれまで部分的に更新してきた結果、全体としての統一に欠ける面もあり、観覧の動線の見直しと併せて、構成や内容についても全体を通して見直す必要がある。見直しに当たっては、より長い時間をかけて観覧できるような構成とすることが必要である。また、戦争体験のない世代にも、原爆被害の全体像が理解され、被爆が今日も続く問題であることを認識できるようにする必要がある。

③ 展示手法

資料の展示を通して被爆の惨状をより分かりやすく伝えとともに、被爆者や遺族の苦しみや悲しみなどを伝えるため、実物・写真・映像・原爆の絵、模型などの展示手法を研究して、展示の一層の充実を図る必要がある。

④ 観覧後の心情に配慮した場

平和記念資料館の展示を観覧し終わった来館者は強い衝撃を受けている。観覧後に設置しているノートには、来館者の様々な思いが記されている。展示を観覧した後において、来館者がこの変化をきちんと意識し確認することは非常に重要である。

平和記念資料館での体験を記憶にとどめ、これを将来に生かしてもらうため、観覧後の心情に配慮した場を整備し、来館者が気持ちを整理し、展示室で観覧したことをしっかりと受けとめられるようにしていく必要がある。



写真7 遺品の三輪車を見る来館者



写真8 観覧後の様々な思いが記されたノート

(3) 観覧動線及び諸室配置の見直し

① 基本的な考え方

ア 観覧の動線

初めて訪れる来館者や、限られた時間の中で観覧する来館者にも、本館(被爆の惨状の展示)の観覧に十分時間がかけられるようにするため、本館から観覧し、その後東館を観覧する動線を検討する。

一般的に来館者は両館の展示を観覧するが、動線は本館、東館のいずれかの展示を選択して観覧することも想定したものとする。併せて、東館は来館者が観覧目的や滞在時間に合わせて選択して観覧できるように検討する。

また、観覧の動線に合わせて高齢者や身体障害者などにも配慮して、エスカレーター・エレベーターの設置も検討する。

さらに、原爆死没者慰霊碑、原爆ドーム、元安川などの被爆に関連した施設が観覧の動線の途中で見通せるように考慮する。

イ 諸室の配置

入口ロビーはできるだけ広い空間を確保して、来館者が滞在しても混雑が生じないようにするとともに、来館者の利便性を考慮して、観覧の動線、観覧所要時間などのガイダンスコーナーをはじめ、総合案内、コインロッカーなどのサービス施設を配置する。

また、本館の展示を観覧する前に、常設展示の全体像が分かるような情報を提供するため、導入展示（詳細は 14 ページ参照）を設ける。

さらに、来館者が展示を観覧したことを記憶にとどめ、これを将来に生かしてもらうため、「観覧後の心情に配慮した場」の充実を図る（詳細は 18～19 ページ参照）。設置場所については、本館の観覧後や東館の観覧後などが想定できるが、観覧の動線、諸室の配置などを総合的に勘案して決定する。

そのほか、企画展示室は、より多くの来館者が利用できるよう、また、企画展だけの観覧にも対応できる配置とする。

なお、現在、地下と 3 階に分かれている事務室についても、観覧の動線を優先的に検討した上で、その配置について検討し、効率性や機能性の向上が図れるよう、ワンフロアに集合させた配置とする。

② 観覧動線と入口案の具体的検討

観覧動線と諸室配置の基本的な考え方にに基づき、来館者を本館に円滑に誘導するため、平和記念資料館入口を再検討する必要がある。入口の案としては、東館、本館、国際会議場の3案が考えられる。今後、重要文化財としての建物の保存、来館者の利便性、建築上の課題や整備費、観覧の動線と諸室の配置などを総合的に比較検討した上で決定する。

このため、ここでは入口3案についての観覧の動線と、その検討課題を次のとおり示す。なお、これに関しては、31～32ページの「5 観覧動線と諸室配置」において試案を図示する。

館の入口	観覧の動線	検討課題
東 館	来館者は東館から入館して直接3階に上がり、本館へ移動し、被爆の惨状の展示を観覧する。その後、東館3階へ戻り、東館の展示を観覧後、1階から退館する。	・東館1階から3階への移動手段（エスカレーター等）の設置及び東館1階と3階の大規模改修。 ・観覧者の渡り廊下の往復に伴う拡張整備。
本 館	来館者は本館から入館して被爆の惨状の展示を観覧する。その後、東館3階に移動し、東館の展示を観覧後、1階から退館する。	・本館ピロティから館内への移動手段（エスカレーター等）の設置。 ・本館ロビーの確保及び入館時の混雑の緩和策。
国際会議場	来館者は国際会議場から入館して直接3階に上がり、本館へ移動し、被爆の惨状の展示を観覧する。その後、東館3階へ移動し、東館の展示を観覧後、1階から退館する。	・国際会議場1階から3階への移動手段（エスカレーター等）の設置。 ・国際会議場の諸施設や機能の一部縮小への対応。

(4) 展示構成の見直し

平和記念資料館の常設展示は、本館の展示(被爆の惨状)と、東館の展示(被爆前から今日までの広島への歩みや平和への取り組みなど)の2つに大別される。

また、常設展示に加えてこれを補完する企画展示がある。企画展示は「学徒動員」「学童疎開」など特定のテーマを設定して、被爆に関することを常設展示より深く掘り下げたり、別の視点で紹介する展示であり、再来館の動機づけにもつながるものである。

展示の構成については、これらの展示の特性や、趣旨を踏まえて、見直す必要がある。

① 常設展示について

ア 導入展示

常設展示を観覧する上で展示の全体像を予め短時間で紹介するもので、後に続く本館(被爆の惨状)の展示を予見させる内容とし、被爆の経緯や一瞬にして都市が壊滅した状況について来館者が概要を把握できるようにする。

イ 本館の展示 (被爆の惨状)

犠牲者の遺品などの実物、被災写真や映像などを使い、原爆の威力を物理的・医学的な側面から客観的に紹介し、来館者に被爆の惨状や核兵器の非人道性を伝える。

また、人体、物、都市への影響にとどまらず、一瞬にして失われた命の尊さとともに資料の背後にある遺族の悲しみなども伝える展示とする。

ウ 東館の展示 (被爆前から今日までの広島歩みや平和への取り組みなど)

来館者が、被爆が単なる過去の出来事ではなく人類の存亡にかかわる普遍的な問題であると認識し、平和の実現に向けて思いを新たにできるものとする。

このため東館の展示は、本館の被爆の惨状を知る展示に対して、被爆前から今日までの広島歩みや平和への取り組みなど、広島被爆と密接に関連する項目を中心に展示する。

また、復興についての展示は、都市の復興の視点に加えて、市民の暮らし、今日もなお原爆症に苦しむ被爆者の生涯などにも視点をあてる。

さらに、核を取り巻く世界情勢の展示については、時点修正や新たな情報の追加が困難な固定的な展示を避け、最新の情報が反映できるようにする。

② 企画展示について

企画展示は、展示の構成や内容が長期的に固定化した常設展示を補完するとともに、再来館の動機付けにもつなげるため積極的に実施する。

企画展示のテーマは、常設展示に関連した内容を深く掘り下げたもののほか、展示期間が短期間で展示更新も行いやすいため、タイムリーで話題性のあるものも取り上げる。

また、原爆や平和に関する理解を深めるため、専門性の高いテーマも取り上げる。

(5) 展示手法の検討

本館は、被爆した実物資料や犠牲者の遺品を中心に展示して、被爆の惨状を紹介しており、東館は、被爆前から今日までの広島歩みについて、被爆に関連する事項を取り上げ、写真などとともに紹介している。

平和記念資料館の収蔵資料には、犠牲者の遺品などの実物、被災写真、市民が描いた原爆の絵、記録映像、被爆者証言ビデオなどがある。本館、東館の展示構成を踏まえて、それぞれの資料の特性を生かした効果的な展示とするため、既存資料の展示手法を検討するとともに、仮想映像や疑似体験などを活用した新たな展示手法について検討する。

① 既存資料の展示手法

ア 実物（犠牲者の遺品、被爆に関係する戦時下の資料、文書資料など）

犠牲者の遺品は、展示解説文で被爆した場所、犠牲者の状況、寄贈者の思いなどを紹介し、一瞬にして失われた命の尊さとともに資料の背後にある遺族の悲しみなどを伝える。

実物資料の中でも被爆した衣類などは、被爆の状況や身につけていた人を想像させるため、可能な範囲で立体的に展示する。

そのほか、瓦やガラスビン、溶融塊などの資料は、数量の多さで被害の状況を印象付けることができるためまとめて紹介する。

また、被爆に関係する戦時下の資料は、当時の状況や被爆との因果関係を知る客観的な資料であり、解説を添えて分かりやすく展示する。

さらに、被爆の惨状を理解しやすくするため、地図や被災写真なども併せて展示する。



写真9 籐製の展示具に着せて展示した中学生の遺品（本館）

イ 写真（被災写真など）

被災写真は被爆の惨状を客観的に伝える資料であり、撮影場所や撮影時期などの解説を添えて展示する。

また、広島上空の航空写真、パノラマ写真は、被害の大きさを一望できるため、導入展示などにも使用する。

なお、人体被害を撮影した写真は凄惨な事実を記録していることから、展示に当たっては児童・生徒への心理的な影響を考慮する。

ウ 映像（記録映像、被爆者証言ビデオ、製作映像など）

被爆直後に撮影された記録映像は、被災写真とともに被爆の惨状を客観的に伝える資料である。また、製作映像は記録映像を編集し

た映像や史実に基づき再現された映像などで構成されている。こうした映像は、展示の項目に合わせて短時間に編集し、撮影場所や撮影時期などの解説を添えて使用するとともに、ビデオシアターや情報資料室などで、全編ないしダイジェスト版が観覧できるようにする。

また、被爆者証言ビデオは、被爆者自らの声で被爆当時を語るもので、来館者の感情に訴えることができることから、ヒロシマからの象徴的なメッセージとして展示の後に総括する形で活用する方法もある。証言はストーリー性があり編集困難なものも多いため、情報資料室などで被爆者証言ビデオ全編が観覧できるようにする。

そのほか、新たに原爆記録映画を製作し、館内での上映や貸出しを行う。

エ 市民が描いた原爆の絵

被爆直後の被災写真や記録映像が少ない中で、被爆者自らが体験を基に描いた原爆の絵は、被爆の惨状を伝える貴重な資料である。その多くは、絵中に作者の解説が記されており、被爆当時や絵を描いた時の被爆者の思いを伝えている。

原爆の絵は描かれた人、物、場所、時間、状況などによって分類することもできるため、テーマごとに組み合わせて展示する。



写真10 市民が描いた原爆の絵

オ 模型

被爆前後の市街地のパノラマ模型は、一瞬にして都市が壊滅した被爆の惨状を一見して理解できることから、観覧者が個別の展示を理解するために役立つものであり、効果的な配置を検討する。

そのほか、戦時下の建物疎開作業、戦後のヤミ市などの状況を模型で展示することも、分かりやすい展示につながる。



写真11 東館の被爆前後の市街地のパノラマ模型

② 新たな展示手法

ア 仮想映像

被爆の状況を具体的に理解させるため、コンピューターグラフィックによる3次元仮想映像を作成し、展示に活用する。例えば、被爆した実物のうち直接触れることができない貴重な資料の画像データをコンピューターに取り込み、パソコン装置で自由に動かして裏側が見られるなど手にとったように立体的に観察できるようにする。

また、上空から真下を撮影した空中写真を、鳥瞰（ちょうかん）画像（斜め上方向から見た空中写真）として立体的に見せる手法も開発されており、被爆前後の広島を一望できる新しい展示の手法として導入を検討する。



写真12 被爆直後の広島市街地の鳥瞰画像

イ 擬似体験・実験

擬似体験や実験を活用した来館者が参加できる展示は、近年、多くの博物館で導入されており、平和記念資料館でも児童・生徒が関心を示しやすく学習の動機付けになるとの理由で要望が寄せられている。しかし、一方で被爆の惨状や原爆の威力を正確に伝えることができない面もあると考えられることから、どのような手法が適切かを研究していく必要がある。

(6) 観覧後の心情に配慮した場の充実

① 現状と課題

来館者は展示を観覧して衝撃を受け、様々な感情を抱く。しかし、それを整理したり、平和について考えたりすることが十分にできないまま、平和記念資料館を後にしている。このため、観覧後の来館者の心情に配慮し、次の行動につなげていくような場を充実させていく必要がある。

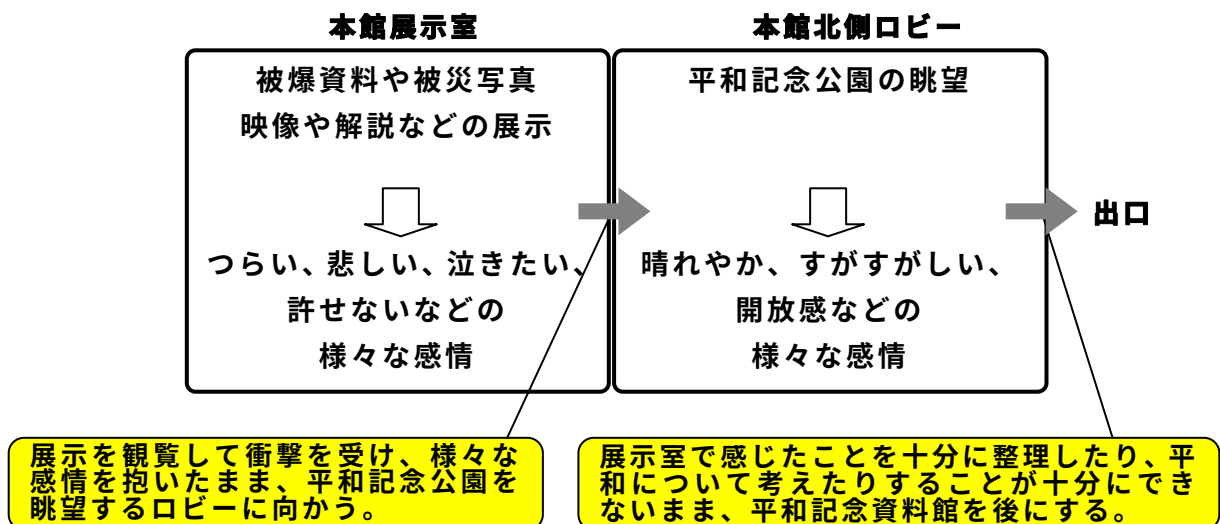


図9 展示室から出口までの現状

② 観覧後の心情に配慮した場

来館者が観覧後の感情を整理し、これを文章や絵などで表現したり、人と会話したり、原爆や平和に関する情報を入手できるように場の充実を図る。これらの空間を来館者が利用することにより、次の行動につなげていけるようにする。具体的には、次のような機能を持たせた空間とする。

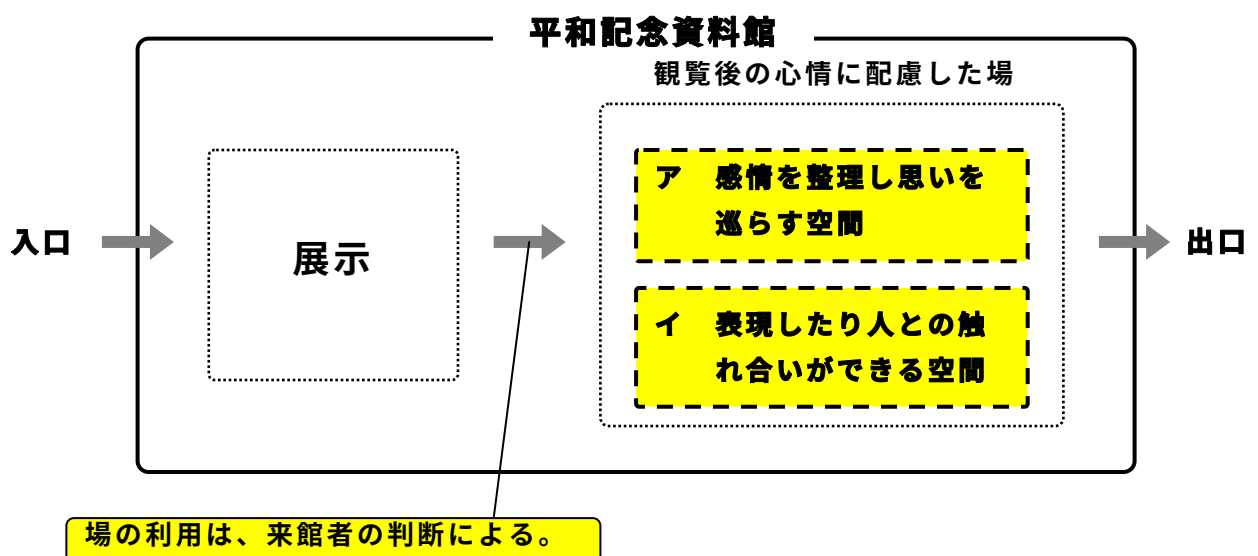


図10 観覧後の心情に配慮した場

ア 感情を整理し思いを巡らす空間

つらい、悲しい、泣きたい、許せないなどの来館者の感情を表し、整理することができる空間とする。また、来館者が様々な思いを巡らせたり、静かに考えたり、犠牲者に思いを寄せたりすることができる空間とする。

具体的には、案内や解説などの情報をできるだけ少なくし、過度の装飾などのないシンプルな空間とする。また、照明、音楽・音などで五感に働きかけながら、落ち着いた雰囲気の中で気持ちが和む空間づくりについても検討する。

イ 表現したり人との触れ合いができる空間

来館者が観覧後の気持ちを文章や絵などで表現したり、対話などによって人と人との触れ合うことができる空間とする。具体的には、電子メール、手紙、メッセージカードなどを書く、絵を描く、折り鶴を折る、人に気持ちを話すなどが考えられる。これらを行うための雰囲気づくりとして、例えば湯茶を飲みながらゆっくりと会話できるようなことについても検討する。

併せて、来館者が原爆や平和に関する情報を入手したり、知識を深めたりすることができる空間とする。

さらに、平和記念資料館を離れた後、来館の感想や平和への思いや決意などについて、インターネットなどを通して伝えることができるようにする。